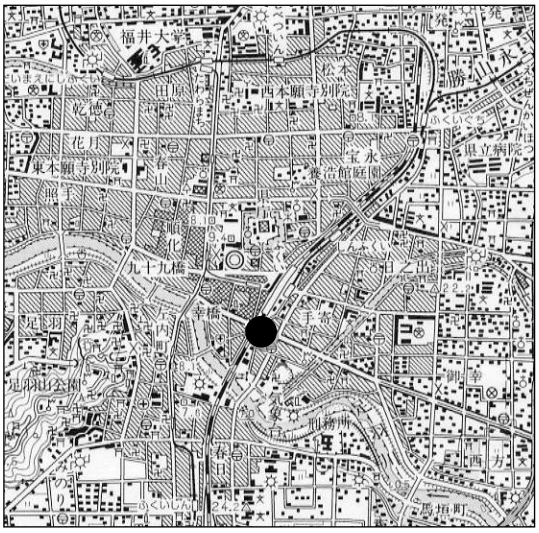
7．福井城跡（ふくいじょうあと）

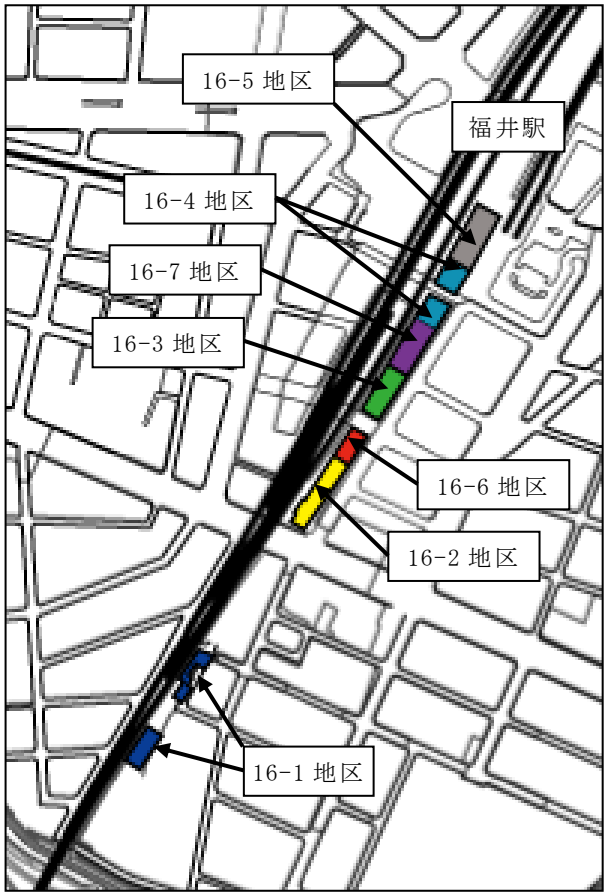
（北陸新幹線福井駅部・16－1～7）

所 在 地：福井市豊島１丁目・手寄１丁目
調査原因：北陸新幹線建設事業
調査期間：平成 28 年 4 月 1 日
～平成 29 年 3 月 31 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査ｾﾝﾀｰ
調査面積：6,390 ㎡（表面積）
時　　代：奈良・平安時代、中世、近世

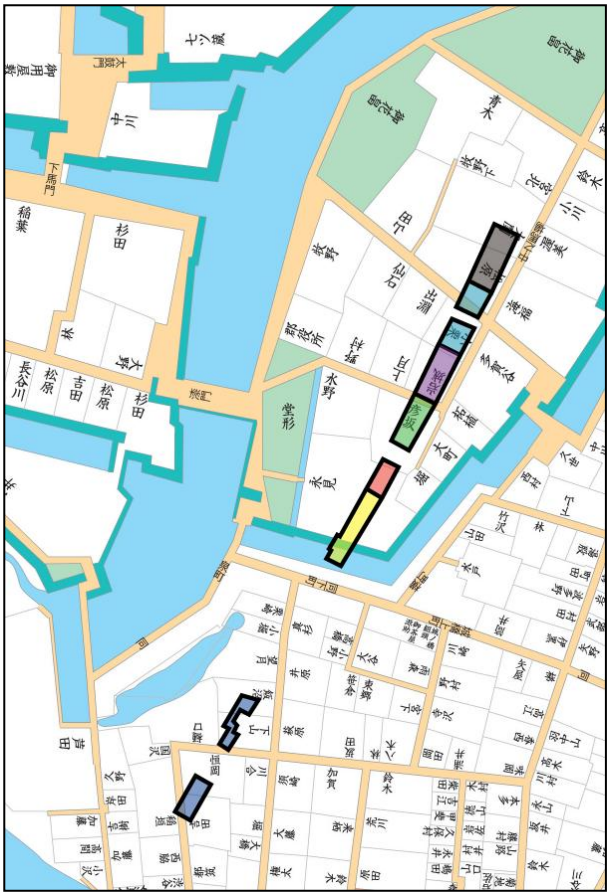


位置図（S＝１/50,000）

調査の概要　北陸新幹線福井駅部の建設に伴い、近世福井城跡の発掘調査を行いました。調査地は、福井城本丸の南方に位置し、「城ノ橋」「中之馬場」と呼ばれた武家屋敷が立ち並ぶ地域にあたります。調査区は 16－1～7 の 7 地区に分かれ、うち 16－6 地区は平成 29 年度も調査を継続しています。16 世紀後葉に柴田勝家が築城した北庄城の時期の遺構を広い範囲で確認したほか、16－1 地区では奈良・平安時代の遺構も見つかっています。（中原義史）



調査区の位置



調査区の位置（享和３年・1803 年の屋敷割りと対照）

＜16－1 地区の調査＞

調査の概要　16－1 地区の調査は、福井駅東口から約 500m 南の地点で行いました。調査地の南方には、北東方向から流れる荒川と南西方向から流れる足羽川の合流点があります。近世の城下絵図によると、調査地は通称「城ノ橋」地区の南西部にあたり、もともと４つの武家屋敷地が存在したと想定されます。調査地は３地区に分かれ、便宜的に１～３区と呼び分けています。１区は２面、２区は３面、３区は２面にわたる調査を行い、近世の武家屋敷に伴う遺構と古代の遺構を確認することができました。

近世の遺構・遺物　近代以降の開発によって近世の遺構の多くは失われたとみられますが、破壊をまぬがれた井戸や、ゴミ穴、排水や区画のための溝などが見つかりました。城下絵図によると、調査区北側（１・３区）は慶長 18 年(1613)まで桜木助之条邸であったと記されています。以降、調査地を含む城ノ橋地区が、タテ町型と呼ばれる南北方向に敷地が並ぶ屋敷割となったのを機に、調査区北側の屋敷地は南北に分割されます。屋敷地を南北に分かつ溝と断定できるものは確認できませんでしたが、１区で見つかった南北に走る溝は、築城当初から屋敷地の西境として機能していた可能性があります(写真４)。

一方、調査区南側（２区）は南北２つの屋敷地にまたがっています。慶長 18 年(1613)、北側の屋敷地には城下絵図に名前が記されていないことから空き地であったと推定され、南側は安藤太郎左衛門邸であったとされています。その屋敷境を走る溝と考えられるのが、調査区南側（２区）で見つかった２条の溝です。

これら屋敷境を走る溝の周辺からは、土器や陶磁器、漆器、箸などの食器や動物の骨、下駄といった、日常生活で出るゴミが捨てられた穴が数多く見つかっており、当時の人々の生活の一端を垣間見ることができます(写真５)。

２区の北東部にて見つかった井戸は、上総掘りと呼ばれるタイプのものです（写真６）。井戸枠の底板に穴があり、そこに竹筒が差し込まれていたことから、地下水が湧き出る仕組みをもつ自噴式の井戸であることがわかりました。また、井戸の上部が壊され、そこから井戸の底に至るまで、笏谷石を含む人頭大の石が詰め込まれていました。井戸が使われなくなった後、井戸枠の上部を外してから、ゴミ捨て場として利用したものと考えています。

平安時代以前の遺構・遺物　調査区南側（２区）にて、古代の溝や大小さまざまな穴が見つかりました。一方、調査区北側（１・３区）の調査では古代の遺構がほとんど確認できなかったことから、調査区南側（２区）の周辺が古代の集落の北端にあたり、それより北には広がらないとみられます。出土した遺物には、土師器や須恵器をはじめ、鉄釘や鍛冶をおこなう際に生じる鉄くず(鉄滓:てっさい)などがあります。そのほか、古代の遺物に混じって、古墳時代の土師器の破片も出土しました。

まとめ　今回の調査では、次の３つの調査成果が得られました。一つ目は、武家屋敷地の境を走る溝を確認したこと。二つ目は、井戸や屋敷地の縁辺部に広がるゴミ穴など武家屋敷の生活の痕跡を見つけたこと。三つ目は、古代の溝や穴を確認し、当時の集落の北端を推定することできたことです。（佐々木芽衣）

写真１　１区全景（東から）

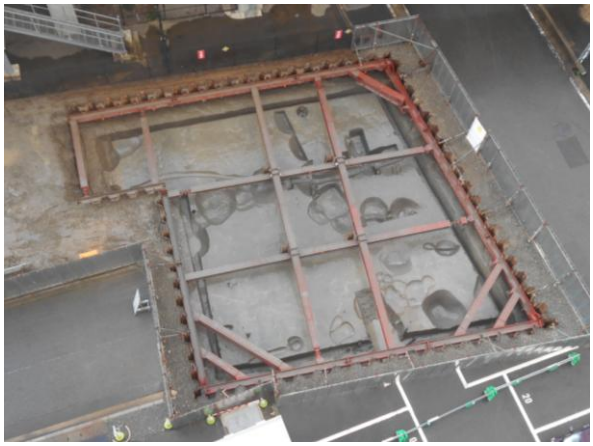


写真２　３区全景（南から）

写真３　２区全景（東から）

写真４　南北溝（１区・南東から）

写真５　ゴミ穴（２区・南から）

写真６　井戸の断面（２区・南から）